

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2017 加藤 陽子

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



日本近代史における「偶然」～裕仁皇太子外遊の意味

東京大学大学院人文社会系研究科 加藤陽子

1、はじめに 紙のレジユメをめぐる

- マッカーサーの洞察～1944年6月、アメリカ太平洋陸軍内部に心理作戦部（部長は Bonner F. Fellers 准将）設置
- アメリカ、中国共産党、中国国民政府が、対日宣伝で協力していた時代～アメリカの情報機関（OSS 戦略諜報局、OWI 戦時情報局）は、延安の日本兵に接触し、捕虜や捕虜教育にあたっていた野坂参三（岡野進の名で活動）らの戦争観・天皇観などを聴取し、延安レポート作成。参照、「延安レポート 第69号 南西太平洋のピラに対する批評」、山本武利編訳、高杉忠明訳『延安レポート』（岩波書店、2006年）765頁所収

2、皇太子外遊にみる「偶然」 参照、加藤陽子『天皇の歴史 08 昭和天皇と戦争の世紀』（講談社、2011年）

- (1) 時期 1921（大正10）年3月3日～9月、訪問相手国はイギリス、フランス、ベルギー、オランダ、イタリア、ローマ教皇庁
- (2) 昭和天皇自身の回顧
 - 1942年12月11日、侍従小倉庫次に対して「自分の花は欧州訪問の時だったと思う。〔中略〕自由でもあり、花であった」
 - 1961（昭和36）年4月24日那須での会見「感銘が深かったのはヨーロッパ旅行〔中略〕ジョージ五世閣下と親しくお会いし、イギリスの政治について直接知ることができて参考になった」
 - 1970（昭和45）年9月16日那須での会見「それまでの生活はカゴの鳥のような生活でしたが、外国に行って自由を味わうことができました」
- (3) 何故、偶然が生じたか 反対派と推進派の激しい意見対立 参照、梶田明宏「大正十年皇太子御外遊における訪問国決定の経緯について」、『宮内庁書陵部紀要』第57号（2006年3月）、坂本一登「新しい皇室像を求めて—大正後期の親王と宮中」、『年報 近代日本研究 20 宮中・皇室と政治』（山川出版社、1998年）、波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』（草思社、1998年）
 - 外遊反対勢力～貞明皇后、宮中某重大事件〔良子皇太子妃候補の色盲問題〕の人倫派、宮内省東宮大夫（浜尾新）、国家主義者
 - 外遊推進勢力～元老（山県有朋81歳、松方正義84歳、西園寺公望70歳）、首相原敬、宮内省若手官僚（西園寺八郎〔西園寺公望女婿〕式部官、松平慶民〔松平慶永の五男、オックスフォード大学卒〕侍従、二荒芳徳〔東大政治学科卒業、愛知県内務部に務めた後欧州研修〕宮内書記官）
 - 反対派の実力行動の恐れ 1921年2月11日を期して、横浜までの枕木に。反対派の反対の論拠は？
 - 皇后に対して松平慶民の言上メモ「現在東宮職ノ方針ハ知育ニ偏シ常識ノ教育方法ニ欠陥アリ、御外遊ハ之ヲ補フナリ」、皇后への最終的説得は西園寺公望。皇后「孝道上此際御洋行如何」、西園寺「皇祖皇宗ニ対セラレ国家将来ノ為メ御洋行ハ即チ孝道ナリ」～『原敬日記』1920年10月21日条。山県→原へ伝える。
- (4) ヨーロッパの「荒野」を見る
 - 戦場 ベルギーのイープル、フランスではヴェルダンとソンムを見る
 - 「東宮御渡欧映画」がもった歴史的意義～藤岡篤弘、横山孝博、ヤン・シュミット各氏の論考
 - 約700万人の国民がこのニュース映画を見る。日本国民が荒廃した欧州戦跡に立つ皇太子を見たことの意味

3、新時代を迎えて

(1) 宮中を管理しうる二つの存在 強力な政党、強力な元老の死

- 強力な政党政治家・原敬（1856年～1921年11月5日）の暗殺による死去

○政治と軍事、二つの領域をおさえられる元老・山県有朋（1838年～1922年2月1日）の長逝

(2) 摂政という地位

○裕仁皇太子（昭和天皇、1901年～1989年）が摂政に就任（1921年11月25日）して初めて迎える年

○大正天皇（1879年～1926年）と摂政、この二人が存在する時空

○貞明皇后と摂政の関係を位置づける安定的な法、前例なし

(3) 国民の前に姿を現す摂政、旅する摂政

○1921（大正10）年9月3日、外遊から帰国

○同年9月4日の新聞、裕仁皇太子が国民に直接呼びかけるかたちで書かれた異例の御詞＝令旨を掲載

○訪問した各国で受けた歓迎は「予に対する厚意の表現に止まらず、実に我国民に対する友情の発露」との表現

○奉祝行事 9月8日午前は、東京市長後藤新平主催、日比谷公園で帰国奉祝会

同日午後は、同じ場所で青年団主催の奉迎会

○9月28日、朝日平吾（32歳）、安田財閥総帥安田善次郎を暗殺（安田講堂は、安田の匿名の寄附、1921年起工、25年竣工）、9月3日「死の叫び声」～「東宮殿下を奉迎するの日に書す」、「日本国の隆盛は七千万国民の真の和合と協力」。9月14日「斬奸状」～唯一攻撃を免れていたのは、「未だ二十歳に満たざるの年少者」

○1922（大正11）年には、摂政として北海道と四国、2度の行啓

○宮内大臣牧野伸顕のコメント→「今回の実験に鑑み将来十分詮議を遂げ改善すべき事」を宮内省が考察を深める過程

○軍事はもちろん、教育振興・産業育成へ配慮する「摂政像」

○戦後の象徴天皇（特に明仁天皇）の行為の核としての公的行為、「被災地への慰問、戦争慰霊の旅」と通底

4、太平洋戦争最終盤の終戦工作 天皇利用についての日本とアメリカ

(1) 東京帝国大学法学部長・南原繁をはじめとする七人の教授の終戦工作

○天皇に注目した日本側グループ～「皇室と国民を直結させておく」、参照、丸山眞男・福田歓一『聞き書き 南原繁回顧録』（東京大学出版会、1989年）269頁

○アメリカ史の高木八尺～太平洋問題調査会常任理事。高木は内大臣木戸幸一と学習院で同級

○教授グループの構想～「陸軍の徹底抗戦論をおさえるには、宮中一重臣の線しかない。どうしても陸軍がきかないなら、海軍の力をつかう以外にない」、参照、前掲『聞き書き 南原繁回顧録』267頁

(2) アメリカ側でも

○兵士と国民の感情を、軍首脳部から引きはがす 参照、拙稿「南原繁と太平洋戦争」、南原繁研究会編『南原繁と戦争』（横浜大気堂、2016年）

○1944年11月15日実施の、日本人捕虜に対する調査 「現在行われている戦争で、一番責任がある人は誰ですか」

○戦場で戦っていた一般の日本兵が抱く天皇への尊崇の念を否定しないこと、また日本兵と軍首脳の間楔を打ち込むこと、これが、アメリカと中国の、対日心理戦に共通する姿勢

○平和のシンボルとしての天皇利用計画の最も早いものは、1942年6月、アメリカ陸軍省軍事情報部「日本計画」。これを書いたのは、チャールズ・ファース（Charles B. Fahs）。「過去において日本の軍部指導者は、天皇の象徴的側面を彼らの軍事的企みに利用してきた。にもかかわらず、天皇シンボルは、軍部への批判の正当化と平和への復帰を促し、強化するために利用することが可能」。参照、加藤哲郎『象徴天皇制の起源』（平凡社新書、2005年）30頁。

○天皇像の転換 軍服姿の大元帥天皇→平服で巡幸する天皇

○復元ポイント 国民が目にした皇太子・摂政時代の昭和天皇像